

1962年8月八ヶ岳の一角、切り立った広大な急斜面のスソ部分に広がる花畑は、高知市のチョウ以外に生きた姿をみたことのない私にとってまるで夢のような光景が展開していた。きれいなベニヒカゲが乱舞し、裏面に白い筋模様が入っていかにも高山チョウを思わすクモマベニヒカゲも混じる。タテハでは初めてのシータテハが多く、花を訪ずれることは少ないはずのエルタテハもアザミ類の蜜を夢中で吸っている。クジャクチョウもいたはずなのになぜか標本はなく記憶もうすい。右図はいずれも私にとっての初採集となる2種で採集地を中山峠としているが、正確には茅野側からの登りでクロユリ平を経て中山峠を越えた場所から、登山道はずれて道なき樹林を横切って入り込んだ急斜面の草原だ。下諏訪市の津田進さんが案内して下さった、多くの人には知られていないチョウの宝庫だったようだが、その後、津田さんはチョウの世界から遠ざかっておられ、私も以降訪れたことはなく、ベニヒカゲなど多くのチョウが飛び遊ぶあのすばらしい環境が今でも残っていてほしいと思うばかりだ。エルタテハは前日の霧が峰和田峠から落合へと林道を下りる途中で、野鳥に捕獲されてしまう瞬間を目撃している。



再び信州のチョウを楽しめたのが1968年8月。美ヶ原山本小屋周辺の黄色い花が咲く一角にクジャクチョウとともに花蜜を吸うシータテハが多く、エルタテハの採集標本もあるが、こちらは花畑ではなく駐車場まわりの路面にいたのだと思うが確実な記憶はない。バスを利用して移動する時間が迫っている状況で、バス停のかなり下方にみえたキベリタテハを急ぎ走り降りて初捕獲できた感動の方が強く印象に残っているせいだろう。

シータテハやエルタテハは、これらのチョウとの出会いを目的としてどこかに出かけるということではなく、大好きなキベリタテハとの出会い目的で訪れる信州や山梨塩山市などで2種ともに必ず出会えるチョウという印象だ。なかでもエルタテハはどこでも多数頭をみることは少なく、シラカバやダケカンバの樹肌にとまる姿を撮影できたらと思うが、2014年7月のしらびそ高原でも防護壁からの染み出し水を訪れる場面くらいしか撮影チャンスがえられていない。



エルタテハの学名は *Nymphalis l-album samurai* で、命名者の Fruhstofer がどういういきさつで *samurai* という亜種名をつけたのか、今井彰著「帝揚羽蝶 命名譚」(草思社、1996)のp.67-69に、Fruhstoferが1899年に約2か月間日本に滞在した際、横浜から長崎までの活動の過程で侍を想起させるなんらかのヒントをえたのではないかという興味のある推察が記されている。

July 12, 2017 富良野布礼別川林道

台風の影響で発生した土石流で破壊された林道行き止まり点から川原に出てみると、倒木で翅を休めるシータテハや、交尾中のミヤマクワガタが3組もいて、このような光景はみたことない。川べりのブッシュをかきわけて進めば、再び荒れた林道を奥へと行けそうだが、ヒグマの出没などこれ以上の単独行動には不安があり、惨めでやるせない気持ちのまま林道の湿り気がある部分にもどってチョウタイム。路面に湿り気がある部分は3か所でそれぞれが約200m離れていて、途中は日照りがきつい乾いた道を歩いて往復するわけだが、北海道なのに日中の気温が30度近くになっていて楽ではない。木陰に止めた車のそばで軽く昼食をとるあいだ、何に惹かれるのかシータテハが車のボディーにこだわるような飛翔を見せて静止する。湿り気があるとは思えない路面にストローを



のばすシータテハも少なくない。